

2023. 11. 16

ケアラー支援推進シンポジウム

北海道認知症の人を支える家族の会
事務局長 西村 敏子

認知症の人を支える家族の会について

- ・昭和62年6月に創立

まだ認知症（当時痴呆症）の理解も情報も社会的な支援もなかった時代から家族同士で励まし合い、支え合い、認知症の理解を求めて各地で活動している団体で、道内には40支部がある。

家族の会の活動



認知症介護 11人の記録 家族の会発刊



北海道認知症の人を支える家族の会は、介護体験記録集「想いを つむぐ 日々から」の本年度版を発刊した「写真」。

1988年からほぼ毎年作成し、今回で第34号になる。体験を共有して支え合おうという趣旨で、認知症の家族を介護していたり、みどりを終えたりした11人が、それぞれの体験を寄稿している。

夫とともに、義母を在宅で10年間介護した女性は、義母に「尽くす」という考え方を変え、義

母1人を預かる認知症グループホームと思って介護を続けた経験を紹介した。また、若年性認知症の父を母と2人で介護した女性は、その経験を基に同じ境遇の子ども世代の人たちが集い、悩みや不安を打ち明けられる場をつくったことへの思いをつづった。

A5判48頁。無料。郵送希望者は住所と氏名、電話番号を明記し、切手350円分を添えて封書で申し込む。宛先は、〒060-0002 札幌市中央区北2西7 かねてる2・7 4階の北海道認知症の人を支える家族の会。問い合わせは同会、電話011-204-6006(平日午前10時〜午後3時)へ。

(熊谷知恵)

認知症 早期発見を 家族の会 チラシ配りPR

世界アルツハイマーデー(21日)に向け、北海道認知症の人を支える家族の会は15日、JR札幌駅前で認知症への理解と早期発見を呼びかけるチラシを配った。

チラシには、アルツハイマー病と診断された後も会社で仕事を続ける青森県の男性(56)の体験談などを掲載。オレンジ色のTシャツを着た同会の会員が市民らに手渡した。

道によると、道内の

その日のTシャツ姿でチラシを配る家族の会のメンバー

認知症の人は昨年3月時点で14万人と、2008年の調査に比べ2万人多く、年々増えている。

同会の飛嶋弘子副会長(72)は「早めに受診すれば支援する人も早く見つかると。不安なことがあれば、かかりつけ医に相談を」と話している。

(上田貴子)





「介護の仕事に興味」■「正しい知識が大切」
 参加した地元の留辺葉高校生

講演に耳を傾ける留辺葉高校生(次巻写真参照)

留辺葉町立留辺葉高等学校(以下、留高)の2年生約50人が、6月17日(土)に札幌市で開かれた「認知症の人と共に暮らすまちづくり研修会」に参加した。研修会では、認知症の現状や介護の重要性について学び、将来の介護職への関心を高めることが目的とされている。

留高の校長は、「本校では、地域社会への貢献を重視しており、今回の研修会を通じて、認知症に対する正しい知識を身につけてほしい」と話している。

参加した生徒は、「介護の仕事に興味がある」と話す者も多かった。また、「認知症の人を大切にしたい」という声も聞かれた。

留高の生徒は、研修会を通じて、認知症に対する正しい知識を身につけてほしいと、校長は話している。

また、参加した生徒は、「介護の仕事に興味がある」と話す者も多かった。また、「認知症の人を大切にしたい」という声も聞かれた。

「自分も認知症に」備える



家族の会 北見で研修会

北見市で開かれた「認知症の人と共に暮らすまちづくり研修会」で、家族の会代表理事の西村敏子さんが講演した。西村さんは、「認知症は、誰でもなる可能性がある」と語り、自分自身も認知症に備える重要性を訴えた。

西村さんは、認知症の症状や診断方法について詳しく説明し、家族や周囲のサポートの重要性を強調した。また、認知症の人に対する適切な対応方法についても触れた。

種類別のケア紹介 どう暮らしたいか考えて

認知症の種類によって、ケアの方法も異なる。家族の会では、認知症の種類別のケア方法を詳しく紹介している。

認知症の種類には、アルツハイマー病、血管性認知症、レビー小体型認知症などがある。それぞれの特徴やケア方法を理解し、適切な対応をすることが大切である。

また、認知症の進行に合わせて、ケアの方法も変えていく必要がある。家族の会では、認知症の種類別のケア方法を詳しく紹介している。

道内サポーター8千人超

認知症サポーターの登録者数が、道内全域で8千人を超えた。認知症サポーターは、認知症の人や家族をサポートするために活動しているボランティアである。

認知症サポーターの役割は、認知症の人の見守りや相談、情報提供などである。認知症サポーターの登録者数が増えることで、認知症の人や家族の生活がより安全で安心になると期待されている。

特別でなく誰もがなる可能性



家族の会事務局長 西村敏子さん

認知症を取り巻く現状に、「認知症を予防できる」という誤った認識が広まっている。西村敏子さんは、「認知症は、誰でもなる可能性がある」と語り、認知症の予防や早期発見の重要性を訴えた。

西村さんは、認知症の症状や診断方法について詳しく説明し、家族や周囲のサポートの重要性を強調した。また、認知症の人に対する適切な対応方法についても触れた。

若い世代は大きな力



青山由美子さん

「若い世代は大きな力」

認知症のケアには、若い世代の力が不可欠である。若い世代は、認知症の予防や早期発見に重要な役割を果たしている。

若い世代は、認知症の症状や診断方法について詳しく説明し、家族や周囲のサポートの重要性を強調した。また、認知症の人に対する適切な対応方法についても触れた。

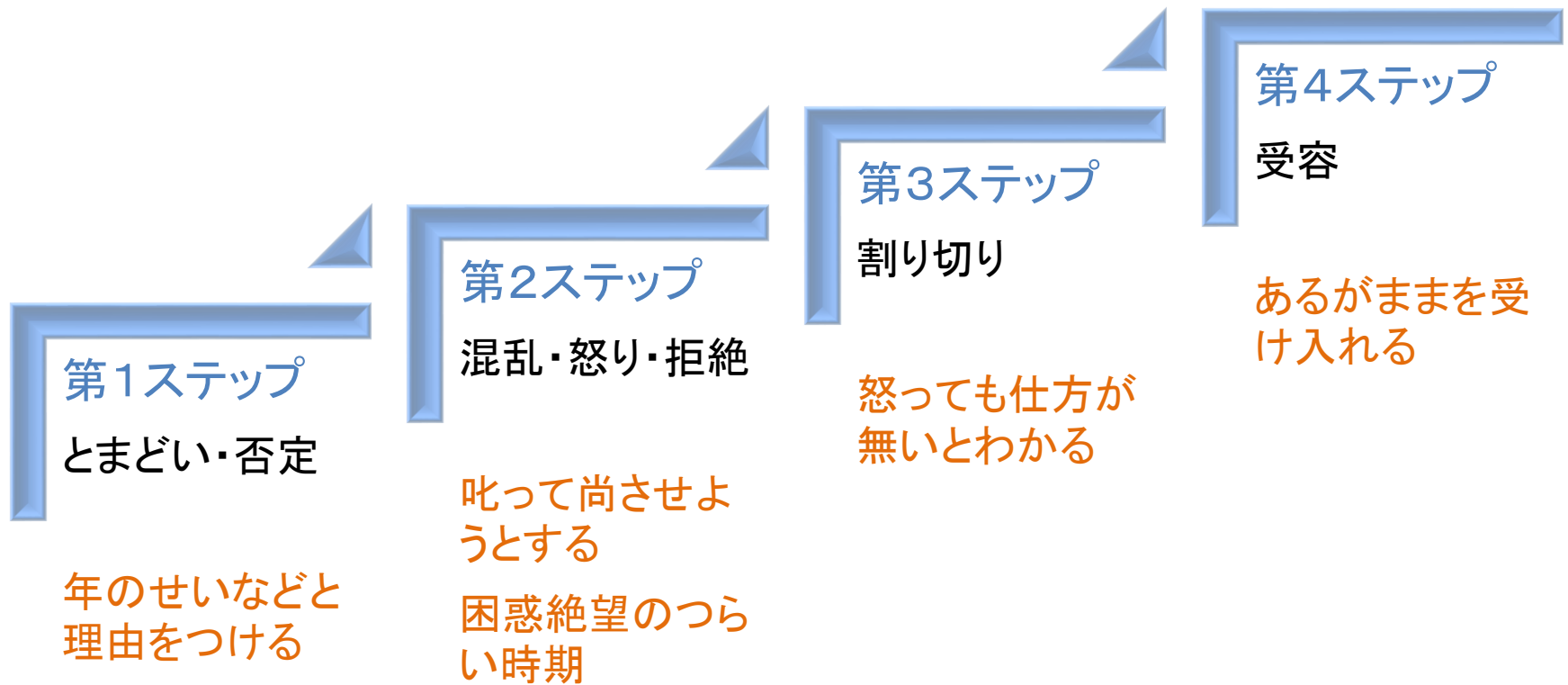
期待している。

認知症のケアでは、認知症の人の立場に立ち、その人らしさを大切にする「パーソン・センタード・ケア」が重要である。認知症の人に対する適切な対応方法についても触れた。

日々のケアで感じていること

1. 認知症は本人と家族支援が一体であること
2. 診断されてから始まること
3. 介護を理由に離職しない
4. 認知症になってもできることはある
5. 介護は負担感ばかりではなく肯定感もある

家族がたどる心理的プロセス



認知症の人への対応と介護のコツ

- 驚かせない
- 急がせない
- プライドを傷つけない
- 一人で抱え込まない・・・サービスの利用
仲間、相談できる人を見つける
- 100%の介護を目指さない
- 自分の人生を大切にする

伝えたいこと

- 知る
- 見つける 探す
- 人と繋がる

- 助けてと言える社会を

